

日本におけるドイツ・ヨーロッパ研究の成果と課題 ——地域研究・国際関係研究の視点から——

木畑洋一

私に与えられた課題は、地域研究や国際関係研究という視点からみて、日本におけるドイツ・ヨーロッパ研究の成果と課題について語るのだと思いますが、正直のところ、私はそれに適した人間ではありません。私の専門的な研究分野は、イギリスに焦点をあてた国際関係史、とりわけイギリス帝国史です。ドイツについての専門家というわけではありません。そういう私が、どういった風の吹き回しか、駒場では DESK の立ち上がりの時からそれに関わり、DESK の組織改革以降は、その責任者をつとめました。ここで報告をご一緒させていただく広渡先生は、DESK の顧問として、また星乃先生は、DESK の組織改革の際の外部評価委員として、DESK の活動を厳しく見つめられてきた方々ですが、ともにドイツ研究の権威であり、そのような方々に交じって、この報告をさせていただくのは、お恥ずかしい限りです。

DESK については、当初から D つまりドイツに強調点が置かれるのか、E つまりヨーロッパに強調点が置かれるのか、という点をめぐって議論がなされてきましたが、こういう事情から、私の報告での力点が E の側に置かれることを、まずお断りしておきます。

それに加えて、日本全体におけるヨーロッパ研究というものの展開について語る材料を私は持ち合わせませんので、身近な例、つまりこの駒場における地域研究に例をとりながらお話することも、お断りしておきます。ただし、これは、日本全体の状況を考える上でも、一つのヒントになるのではないかと、思っています。

対象とするある地域について、政治・経済・社会・文化など、さまざまな側面に注意を払って、多面的・総合的に研究していこうとする地域研究という学問分野は、第二次世界大戦後、日本で新しい高等教育制度が作られるなかで、アメリカから導入されたといつてよいと思います。この駒場の東大教養学部で作られた地域研究の諸セクションは、そのような試みの最初のものでした。しかし、そこでは、ヨーロッパという地域が必ずしも意識されていたわけではありません。駒場の地域研究がスタートした時に作られたのは、アメリカ、イギリス、フランス、ドイツという四つのセクションでした。つまり、イギリス、フランス、ドイツというヨーロッパの大国が研究の対象として設定されたのであり、ヨーロッパといえ、それらを足したものといた程度で考えられていたと思われます。あるいは、イギリス、もしくはフランス、もしくはドイツのことについて、少し幅広く勉強すれば、それでヨーロッパについて分かったつもりになる、という形だったのではないかと、思われます。

地域研究のセクションとしては、その後、アジア、ロシア東欧、ラテンアメリカ

というセクションが加わります。すぐお分かりのように、これらは国家単位ではなく、広い地域が単位となっています。広い地域が単位となったからといって、そのような地域全体を対象とする研究や教育が行われるというわけではありませんが、それでも、この違いはかなり大きかったと思います。また、ロシア東欧という単位が設定されたことにも、注意が必要です。冷戦下でヨーロッパは分断されたわけですが、その分断がもちこまれたわけです。

こうした状況のなかで、ヨーロッパ自体では、西ヨーロッパにおいて地域統合が進行しはじめました。その動きが、駒場でのヨーロッパに関わる地域研究にどこまで反映されたかということについては、実証的な検討を行わないままの印象論で申し訳ないのですが、あまり反映されなかったといつてよいと思います。

第二次世界大戦後、やはり日本の大学の先頭をきって駒場に国際関係論が導入されましたが、この国際関係論の方では、地域統合という視角から、ヨーロッパ統合への関心も比較的が強かったのではないかという気がします。現在 DESK の推進力となっている森井先生も、国際関係論の大学院の出身者です。

こういった傾向が、変化をみせはじめたのが、1990 年代です。いうまでもなく、冷戦が終わりを迎えたことによって、ヨーロッパの分断という状況が解消され、マーストリヒト条約以降、ヨーロッパ統合の質の深まりと規模の拡大が進行していきました。この動きにちょうど駒場での機構改革の時期が重なり、イギリス、フランス、ドイツ、それにロシア東欧の地域研究のセクションに、ヨーロッパという枠組みが導入されることになりました。私も改革に関わった一人ですが、少なくとも政治や経済については、ヨーロッパという次元を重視することがぜひとも必要であると思って、改革に取り組みました。その際、ある程度予期していたことではあります。大切なのは、イギリスであり、フランスであり、ドイツであって、ヨーロッパなどというものを持ち込んでくるのはけしからんという反応を示す先生方もいらっしやいました。

この改革の時、同時に、それまでの国別セクションに加えて、ヨーロッパ・コースという新たなセクションも作ったのですが、これは、そのための新たな人員配置などを伴わず、学生も旧来の国別セクションにまず所属するという形をとったため、なかなか十分な効果をあげられませんでした。

DESK が発足した時の、駒場におけるヨーロッパ地域研究の状況は、そのようなものでありました。ドイツという次元と同時にヨーロッパという次元を重視し、そのために、学部の1年生から大学院学生まで、さまざまな形でヨーロッパ研究を推進していくという、この DESK の活動開始は、駒場でのヨーロッパ地域研究にとってきわめて大きなステップになったと考えています。

駒場におけるヨーロッパ研究について一つ強調しておきたい点は、さきほど述べたようにロシア東欧というセクションが存在してきたことによって、東欧やバルカンに視野を広げる形で、ヨーロッパの問題が検討されてきたことです。そのような

地域に視点を置いた上でヨーロッパを論じることの意味は、たとえば、きわめてすぐれたヨーロッパ論の、日本語訳もある『ヨーロッパ』という本が Norman Davies というポーランド史の専門家によって書かれていたり、こちらは日本語訳がまだありませんが、やはり非常にすばらしい 20 世紀ヨーロッパ史である Dark Continent という本を書いたのが、Mark Mazower というギリシア史の専門家であったりするところに、示されています。この Mazower 教授は、2003 年に DESK が開いた国際シンポジウムに参加されました。このような利点を、これから先も生かしていければよいのですが、将来がどうなるか、不安なところもあります。

さて次に、駒場の問題を離れる形で、現代ヨーロッパについての関心の軸となる、ヨーロッパ統合をめぐる研究について少し話してみたいと思います。

ヨーロッパ統合の具体的な開始時点をどこにとるかにについては、いろいろな見解があると思いますが、一つの目安は、ヨーロッパ石炭鉄鋼共同体というものができきっかけになったフランスのシューマン外相によるシューマン・プランの発表です。それは 1950 年のことでしたから、それから数えれば今年で 60 年ということになります。今の EU の前身といえるヨーロッパ経済共同体 (EEC) は 1958 年に発足しましたから、それからでも 50 年以上がたっています。日本でも、EEC の設立当初からそれにかかなりの関心が寄せられていたことは確かです。ただし、日本の代表的な国際関係、国際政治の学会である日本国際政治学会の機関誌『国際政治』がヨーロッパ統合問題を最初に特集したのは 1964 年のことで、アメリカやソ連、さらには東南アジア、アフリカについての特集がそれよりもかなり前に組まれているところからみると、当時着目すべき地域としてヨーロッパが占めていたプライオリティは、必ずしも高くなかったのではないかと思います。

EU 研究を行っている研究者が集まっている日本 EU 学会が、日本 EC 学会という名前で創設されたのが、1980 年のことで、このあたりから日本でのヨーロッパ統合研究の拡大がはじまったといつてよいのではないのでしょうか。それが 1990 年代以降、ヨーロッパ統合のいっそうの進展とともにさらに進み、21 世紀になって一挙に多くの研究成果が生み出されてきたのだと思います。それにあたっては、EU の肝いりで作られたいくつかの大学にまたがる EU 研究コンソーシアムの活動や、ほかならぬこの DESK の活動などが、大きく貢献してきました。

21 世紀になってからの日本におけるヨーロッパ統合研究に関して強調しておくべき点は、地域統合という問題が日本を含む東アジアの現実の課題として強調されるようになり、ヨーロッパ統合研究の中でもそれが意識されることが多くなったということでしょう。たとえば、亡くなられた森嶋通夫という有名な経済学者が、日本の論壇で 1990 年代に東アジア共同体の創設を提唱された時には、そのようなものは絵空事であるという受け止め方がされましたが、その森嶋さんが 2001 年に『日本にできることは何か 東アジア共同体を提案する』という本を出版される頃になると、そうしたアイデアが砂上の楼閣であるとはみなされなくなっていました。その頃か

ら、ヨーロッパ統合が東アジアにとってモデルになるのかどうかといった議論も盛んになされるようになりました。これについては、さまざまな見解が並立しているというのが現状でしょう。ヨーロッパに比べてアジアの諸国は余りに多様であるとか、世界大戦による荒廃と共産主義の脅威といったヨーロッパ統合を推進した直接の要因に相当するものが現在のアジアには存在しないとか、ヨーロッパ統合はアメリカ合衆国によって支援されたがアメリカは東アジアの統合に消極的であるとか、ヨーロッパと東アジアの違いを強調する議論がどちらかといえば有力なのではないかと感じます。

しかし、私個人は、ヨーロッパといっても非常に多様であり、重要なのは新しい地域秩序を作りだしていこうとする政治的な意志なのではないかと思っています。

私の報告をしめくくるに当たって、この政治的意志という問題に関わって、しばしば第二次世界大戦後のドイツと日本が比較されてきたことに簡単に触れたいと思います。ドイツ・ヨーロッパという表現は、日本・アジアという表現と対比できますが、第二次世界大戦後のドイツとヨーロッパの関係と、日本とアジアとの関係は、どちらかといえば対照的なものでした。いずれの国も第二次世界大戦を引き起こす上で大きな責任があり、いずれも敗戦国となったわけですが、ドイツが戦争中支配した周辺ヨーロッパとの新たな関係の構築に戦後きわめて積極的であり、ヨーロッパ統合の推進役となったのに対し、日本は戦後大きく変化するアジアの状況に対して距離を置き続けました。日本はアジアの一部なのかということが、一貫して問われてきているのではないかという気がしております。東アジア共同体の形成ということが近いうちに実現するなどとは私も思っておりませんが、アジアの将来を構想する上で日本が積極的な政治的意志を示すことが、これからますます求められていると考えます。ヨーロッパについて学び考え、またヨーロッパの中でのドイツについて学び考える意味は、この点からもきわめて大きいものがあります。

それについて DESK が果たすべき役割は重いものがあることを改めて強調して、私の報告を終わらせていただきます。